

十勝の地で木材と歩む

中島木材商事株式会社 代表取締役社長 伊賀 正



■はじめに

今回の企業訪問記は、十勝管内帯広市で古くから木材業を営む中島木材商事(株)です。現社長の伊賀正さんは、当(一社)北海道林産技術普及協会の理事も務めています。多忙の中、企業訪問記取材にお付き合いいただき、色々と話してくださいましたので紹介したいと思います。

中島木材商事(株)はどのような会社か教えてください。

十勝の優良な森林資源を背景に、昭和19年(1944年)十勝管内上士幌町で中島豊と伊賀喜作の半分ずつの出資により創業しました。当時は軍事物資の生産が主で、零戦のパーツをつくっていました。その後、国有木材を主原料に建築材(造作・構造・下地)一筋、今年で73年目になります。

戦後の復興ということで、本州向けの製材生産がほとんど、昭和29年の洞爺丸台風による風倒木処理で増産体制となり、本州への移出をメインに成長してきました。当時はエゾマツが主で、本州へは船便での出荷でした。エゾマツは30cm上しか挽いていなかったようです。

昭和30年代までは卸が90%以上で、道内及び本州へと広範囲に出荷、その後、昭和43年帯広に販売店を出店し、本社機能を帯広に移転し、帯広進出とともに地場工務店直売りをはじめ、売り上げを伸ばすことができました。



昭和50年代のようす

初代社長は中島豊、以後中島一男、伊賀宏、現在は四代目伊賀正となっています。ピーク時の生産量は13,000m³/年で、現在は原木調達等の事情から8,000m³/年程度となっています。

我社の特色は、量は減りましたがエゾマツの良質丸太から構造材(無垢)や造作材を生産していることで、原木2,000m³/年エゾマツを製材しています。他はほとんどトドマツです。地元工務店の施工した軸組物件は、当たり前のようにエゾマツの構造材が使用されています。ちなみに、平成24年に完成した当社の事務所は、自社材を表しにしていますので、小さな社屋ですが近くにお越しの際にはぜひ参考までにお立ち寄りください。



十勝の無垢エゾマツ構造材を用いた社屋、柱は天然林アカエゾマツ材200~300年生、梁は天然林クロエゾマツ材

会社の理念をお聞かせください。

真面目にコツコツとが理念で、品質精度にこだわっています。会社の利益は従業員のものとし、できる限り還元することを誓っていますが、近年なかなか利益が出て来ない状況となっています。

林業の成長産業化と言われていますが、どのように思われますか。また、木材産業の将来像は。

林業・林産業の成長産業化などという話がありますが、全く期待できません。国や道が目を向けるのは川上側ばかりで、価格は川上側から決められ、製品市況は輸入材で決められ、工場はそのしわ寄せをすべて吸収しなければならないのが実態です。そのような中で、自社は品質の差別化を図り、できるだけ市況より高く販売する努力をしていますが苦戦しています。



天然林エゾマツ, KDプレーナー材

その工場の不採算根拠は、国有林主導の原料価格、電気料(北電)、乾燥・輸送燃料は為替の関係、労働環境(国)、輸送料(運送料)等の問題があり、コスト面では自社努力では改善できないのが実情です。そこで、製造ライン更新で生産量を増やそうと思いましたが、莫大な設備投資と原料の安定確保が困難です。原木については、システム販売等で決められて川上側は良くなっているが、川下側は製品を高く売ることができずにいます。

今、国産材自給率を上げようと国の方針の下に努力しているが、経営は非常に厳しいです。家を作るには勿論国産材を使ってほしいが、工務店は高ければ使いませんので、輸入材がなかったら家が建たないのが現状ではないかと思えますし、今後も輸入材依存の傾向は変わらないと考えます。

木材の利用促進については、どのように考えていますか。

木材をもっと使ってもらうためには、木材を知ることが大事です。樹種によって特性があり、それを

知りながら利用して行く必要があります。トドマツは集成材にしても強度が出ないので困っている。無垢材ならなおさら難しい。集成材ではトドマツよりカラマツを使うことになってきますが、強い乾燥をかけると材質の粘りが無くなるような感じがします。その点、エゾマツ天然林材は無垢材でも強度も十分あるので、集成材にする必要はありません。

人乾材に関しては、乾燥技術でカラマツ、トドマツ、アカエゾマツともにねじれは問題なく使えます。また、アカエゾマツは節が小さく、人工林材でも年輪幅が極端に広くなければ50年生くらいで十分原料に使えます。そのようなことを考えると、人工林のカラマツ、トドマツ、アカエゾマツと何の樹種でも用途は問題ないので、適地適木の観点で人工造林してほしいと思います。今はバイオマス原料としても木材は必要となっているので、いわゆる雑木(天然林広葉樹)と言われる用材が採れない林は伐採して人工造林してほしいと思っています。



乾燥を待つ天然林エゾマツ材

木工場の将来像を描くと、どのようになりますか。

木工場はもうからない。私が考えるには、パレット、梱包材を挽くのではなく、高いものをつくらなければだめだと思います。現状で高いものをつくれないのであれば、国では逆算して木1本当たりいくらかの補助をすとか、そういう仕組みを考えるべきだと思います。今、家を建てると材料代に補助すとか、施主が良かったと思うだけのシステムになっている。そうではなく、山に還さなければダメで、ようするに森林所有者に還るようにしなければ、山はつくれません。良い山を持続しなければ、原料が入って来ないで困るのは木工場だけではなくて、皆が困ると思っています。

林産試験場で開発したコアドライは良い製品とは思いますが、「コストを半分にしてくれ」と言いた

いです。今までにも製材工場ではその品質に近いものを自社で研究してきました。我々も品質の高いものを高く売る努力はしてきました。それが定着しないと工場はやって行けない。中・小規模の工場ほど木取りの技術でブランド材として高く売る努力は必要と思っています。常に自社努力でやるしかないと考えています。

また、例えばインターネットのホームページに載せてどうするのかと思うことがある。というのは、建築材1本売れて、それを送っていたら商売になるのかということです。そうではなく、中島木材は良いものをつくっているのだから、材料に中島の製品を使わせる。そのように知人に広めていってもらおう努力をしています。評判を良くして使ってもらおうしかない。そういう目標を立ててやっています。

将来を考えた時に、大量生産は考えられない。設備投資に莫大な費用が掛かり、それだけの売り上げと原料を集めるのは困難です。



天然林エゾマツ無節造作材

林産試験場に望むことは。

確かに研究成果は良いものがあると思うが、商売を考えて研究してほしいと言いたい。企業が伸びていくものを研究してほしいと思います。

アカエゾマツの割れの問題は研究結果が出ていない。トドマツの水食い材もそのとおりです。高度加工、圧縮木材は良いと思うが、コアドライの方向には疑問があります。コアドライは自社努力でも出来ます。コアドライ製品は工業規格に近づけている印象がある。木本来の使い方を研究するべきで、そう

でないと材質の良さは消えてしまうのではないかと危惧しています。

会社の今後に望んでいることはどのようなことですか。

一番大切なことは、北海道が国有林に依存している現状で、これからもそれは変わらない可能性が高いことです。この先研究が進み木を使わなくても良い時代が来るのかもしれませんが、山を育てれば永久的に原料が確保できる森林資源を有効に活用することが環境にやさしい産業として成り立っていくと考えます。

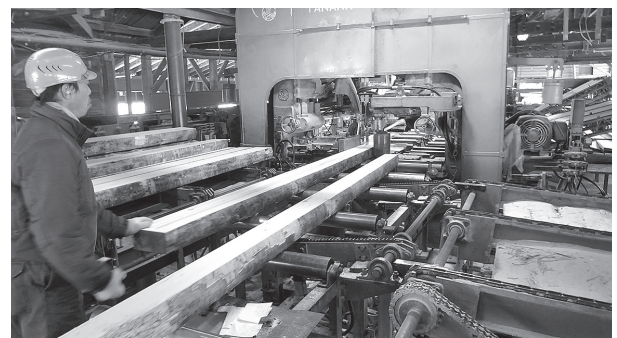
そのためには、手遅れかもしれませんが森林の整備を最優先に考え、荒れ果てた山を豊かな山に変えていかなければならないと思います。

50年後北海道の林産業が今まで以上の姿になっていることを国に期待します。また、我々業界も自社で山林を所有したり、工場を止めて植林のお手伝いをするなど森林整備の一端を担うことにより安定的な原料確保ができるようになることを望みます。

一方で、3.65mのタルキ1本がハンバーガー1個、牛丼一杯より安いような状況、数十年かけて育ててきた(人工林)資源の価値がこれで良いのか疑問です。農業は一年で収穫できるのに……。勝手に育ったものだからこんなものだろうと思われる時代が終わってくれることを願います。

そんな夢を見ながら今後も業界や従業員を守るために製材業一本で努力していくつもりですが、取り巻く外的状況によりなかなか利益に結びついて来ません。当然大きな設備投資も難しい状況で国の方針とは真逆ですが、身の丈に合った小さなことを一つずつ改善しながら裏山の木を自慢し、地元の木とともに歩み未来へつなげていきたいと夢のようなことを呟いています。

余計なことですが、十勝の木はいいものですよ。



工場内ようす